

宣教師による現地語のテキスト化とその帰結：インド，ゴア州におけるキリスト教徒の言語アイデンティティの現在

著者	松川 恭子
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	62
ページ	227-251
発行年	2006-10-10
URL	http://doi.org/10.15021/00001579

宣教師による現地語のテキスト化とその帰結 インド、ゴア州におけるキリスト教徒の言語アイデンティティの現在¹⁾

松川 恭子
奈良大学社会学部

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 はじめに | 4.3 イエズス会 |
| 2 インド・ゴア州の概要 | 5 現代のキリスト教徒たちとコーンクニー語 |
| 3 ポルトガルとカトリック宣教師の到来、
強制改宗 | 5.1 キリスト教徒たちの言語使用状況 |
| 3.1 ポルトガルのゴア征服、インド海洋
帝国の首都へ | 5.2 教会コーンクニー語 |
| 3.2 宣教師の到来と強制改宗 | 6 公用語としてのコーンクニー語とキ
リスト教徒 |
| 4 宣教師による現地語研究・テキスト化
とその意味 | 6.1 コーンクニー語の州公用語化の問題 |
| 4.1 16, 17世紀当時のゴアの言語状況 | 6.2 コーンクニー語研究機関とその活動
の現在 |
| 4.2 フランシスコ会 | 7 おわりに |

1 はじめに

ローマ・カトリック教会の海外布教の動きは、15世紀に始まったポルトガルとスペインによる勢力拡大と密接に結びついていた。ニコラウス5世に始まる歴代教皇は、勅書により、ポルトガル・スペイン両国王に対する布教保護権 (padroado) を認めた。つまり両国が新たに「発見」した土地を勢力下に置くことを認可するとともに、その土地でのキリスト教布教を奨励したのである²⁾。バートロミュー・ディアスの喜望峰到達 (1488年)、クリストファー・コロンブスのアメリカ大陸「発見」 (1492年)、そしてヴェスコ・ダ・ガマのインド亜大陸上陸 (1498年) といった大航海時代の進展とともにアフリカ、アメリカ、アジアにおける両国の勢力範囲は広がった。軍人、商人とともに多くのカトリック宣教師たちがポルトガル・スペイン支配下の土地を目指して海を越えていった。彼らは、福音と文明を未知の世界に拡大していく使命を帯びていた (杉本2002)。その目的のために彼方の地でまず必要となったのは、異教徒に伝達が可能ないようにキリストの教えを現地語に翻訳することであった。宣教師たちは現地語の習得に努め、同時にキリスト教要理などの布教に必要な教材を現地語で出版する作業が行われた。言語を文字で表記し書物として出版するというのは、当該言語を決まった規則と語彙を持つ一つの客体として把握し、固定化することでもある。齋藤 (2002) にならって、それを「言語の植民地化」と呼ぶことができるだろう³⁾。異教徒の言語は書かれること

により、捉えにくい声と音の世界から把握と支配が可能な視覚の世界へと移動させられたわけだ（オング 1991）。そのような過程を経てテキスト化された言語の様式は、植民地支配における権力関係の刻印を残しながら、現在も人々の間で使用され続けている。

以上に述べたヨーロッパ人宣教師による現地語の正書法（特にローマ字アルファベットによる記述法）確立への関わりと、その現代における帰結について、本稿ではインド、ゴア州の事例を用いて考察する。ゴアでは、ポルトガル人行政官・商人とともにやって来たカトリック宣教師たちが、現地語コーンクニー語（Konkani）⁴⁾の理解に努め、キリスト教要理や文法書を翻訳・発行した。この宣教師の流れを汲んだ「教会コーンクニー語」とでも呼べる言語はゴアのキリスト教徒の間で受け継がれ、現在では教会活動と結びつき、キリスト教徒にとっての象徴的意味合いを持つに至っている。

本稿ではまず、ゴアにおける宣教師の現地語に対する取り組みとその意味を明らかにする。次に、その歴史的背景が現代ゴアにおけるキリスト教徒の言語状況にいかなる意味を持っているかを、現地調査のデータから分析したい。その上で、現在ゴア州公用語としてデーヴァナーガリー文字筆記のコーンクニー語が標準とされる状況において、キリスト教徒の「教会コーンクニー語」が持つ周縁的位置づけを明らかにする。最後に、ミッションと植民地主義がもたらした帰結を言語という視点から捉える分析視座の重要性を指摘したい。

2 インド・ゴア州の概要

ゴア州は、インド亜大陸の西海岸ほぼ中央部にある。州の西にはアラビア海が広がり、東には西ガーツ山脈が北から南へと縦断している。隣州はマハーラーシュトラ州とカルナータカ州であり、北の境界を前者と、東と南を後者と接している。面積は3,702平方kmで、日本の奈良県とほぼ同程度の広さを持つ。マハーラーシュトラ州の首都ムンバイ（旧ボンベイ）からゴアの距離は約370kmである。気候は、南西モンスーンの影響で1年の降水量のほとんどが5月～9月の間に集中する。人口は、2001年センサスによれば134万3,998、識字率は82.3%（うち、男性88.9%、女性75.5%）で、ケララ州、ミゾラム州、連邦直轄地のラクシャドウィープに続いて4番目に高い。州におけるヒンドゥー教徒人口の割合は65.8%、キリスト教徒が26.7%、イスラーム教徒は6.8%である。産業は、観光業とともに鉄鉱石を中心とした鉱業が盛んである。鉄鉱石の50%以上は日本に輸出され、現地と日本企業の合弁会社もある。

次章で説明するように、ゴアは1510年のアフォンソ・デ・アルブケルケによるゴア島征服から1961年までの451年間にわたってポルトガル植民地であった。1961年12月19日のインド軍によるゴアの奪回は、「解放 Liberation」と呼ばれている。解放後のゴアは連邦直轄地となり、1963年には民主主義に基づく初の議会選挙が行われた。隣州マ

ハーラーシュトラ州への編入問題を経た後（1967年の住民投票で反編入派が勝つ）、1987年にはインド25番目の州として認定されるに至った。

現在のゴア州は、行政的に2県（district）、11郡（タルーカ taluka = 郡）からなる（図1）。州都はティスワディにあるパナジ Panajiであり、州政府関係の建物が集中している⁵⁾。郡は更に市・村落に分割され、市には市庁、村落にはパンチャーヤト・オフィスが置かれ、地区行政を担当する。

以上の行政区分の他に、ポルトガルの支配下に入った時期によって、旧征服地 Velhas Conquistas と新征服地 Novas Conquistas の区分がある。これについては、後述する。

3 ポルトガルとカトリック宣教師の到来、強制改宗

3.1 ポルトガルのゴア征服、インド海洋帝国の首都へ

ポルトガルがインド亜大陸に渡ってきたのは1498年、ヴァスコ・ダ・ガマがカリカット近くの海岸に到着したのが最初である。その後、アフォンソ・デ・アルブケルケが1510年にゴア島（現在のティスワディ郡）とその周辺の島々を征服し、オールド・ゴア Old Goa に本拠地を置いた。その後、ポルトガルは1543年にバルデズ、サルセテ郡を支配下に収めた。植民地時代初期にポルトガル支配下に入ったこの3郡は、18世紀（1788年）に支配が完了した周辺の新征服地と対比され、旧征服地と呼ばれる。

ゴアは1530年にポルトガルのインド海洋帝国（Estado da India）の首都となった。1533年にはマデ이라島フンシャル Funchal の属司教管区としてインドで初めての管区がゴアに置かれることになった。この管区は、1558年にはコーチン、マラッカを属司教区として含む大司教区に格上げされた。

3.2 宣教師の到来と強制改宗

ポルトガルがゴアで足場を固めていくにつれて、来航するカトリック宣教師の数も増えていった。まず最初にやって来たのは、フランシスコ会（1517年）であり、その後ドミニコ会、アウグスティヌス会、イエズス会と続いた。

1510年の征服以降しばらくの間、ポルトガルのゴア支配は現地人に対する宗教的弾圧を伴うものではなく、現地の慣習を尊重するものであった。例えば、1526年にアフォンソ・メシア Afonso Mexia が、『現地の慣習に関する書（*Foral de Usos e Costumes dos Guancares*）』を編集する。そこには、ゴアに特有のコミュニタード・システムという村落の土地共有制度に関する記述が見出せる。旧征服地での支配権は1543年までは明確に確立されず、ポルトガルは現地人との関係を良好に保つ必要があった。

マハーラーシュトラ州

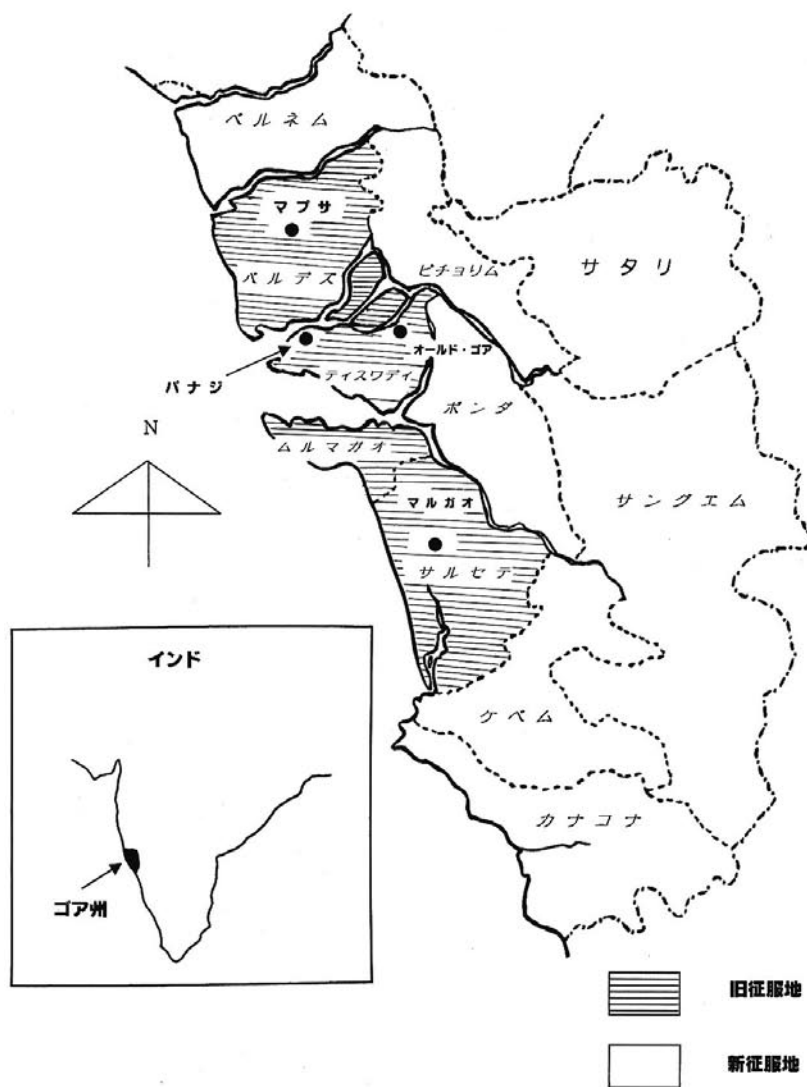


図 1

しかし、1540年代に入ると、ポルトガル植民地政府の方針に大きな変化が現われた。宣教師の提言を受け入れ、政府は現地人をキリスト教へ改宗させる動きを強めていった。旧征服地の至るところでヒンドゥー寺院の破壊が行われた。現地人の改宗後も、彼らの信仰が本物であるかどうかを試された。1560年に設立された異端審問所は、元々はユダヤ人とイスラーム教徒に対するものであったが、ゴアの改宗者に対する影響力もあったと考えられる⁶⁾。キリスト教への改宗者も、カースト制度を維持するなど、完全にヒンドゥー的慣習を捨て去りはしなかったからである。改宗を拒んだヒンドゥー教徒は、18世紀後半になるまでポルトガル勢力が及ばなかった新征服地に神像とともに逃れ、新たに寺院を建設した⁷⁾。ポルトガルは1759年にイエズス会士を追放し、1835年までに全ての宣教会のゴアにおける活動を禁止したため、新征服地でのヒンドゥー教徒のキリスト教への改宗はほとんど起こらなかった。以上の経緯により、旧征服地にはキリスト教徒が、新征服地にはヒンドゥー教徒が多数派であるという現在のゴアでも見られる人口分布の特徴が形成された。宣教師の活動が主に行われ、現在もキリスト教の影響が強いのは旧征服地である。本稿が扱う事例も旧征服地のものである。

4 宣教師による現地語研究・テキスト化とその意味

ポルトガル人兵士・行政官とともに来航した宣教師たちは、神の言葉を現地のヒンドゥー教徒達に伝えるために、その土地の言語での布教政策を取った。これは、神の言葉は普遍であり、どの言語にも翻訳が可能であるという思想の反映であった。ゴアにおいて現地語習得に熱心であったのは、1517年にやって来たフランシスコ会、1542年のフランシスコ・ザビエルに代表されるイエズス会の宣教師達であった。彼らにより、インド諸語では初めてとなる、コーンクニー語の文法書が著された。活版印刷機は、ポルトガルからゴアに1556年にもたらされ、宣教師の著作を印刷・普及するのに活躍した。最初に出版されたのは、フランシスコ・ザビエルによるポルトガル語のキリスト教要理であった。このようにして、ゴアにおける現地語のテキスト化が始まったが、後述するようにローマ字アルファベットがその目的のために使用された。言葉を換えれば、これは現地語をヨーロッパ的視点から紙の上に固定化する作業であった。

4.1 16, 17世紀当時のゴアの言語状況

ゴアはポルトガルの手に落ちる以前、ヴィジャヤナガル帝国、アデル・シャーのビジャプール王国の一部であった。当時の宮廷言語はカンナダ語であり、コーンクニー語もカンナダ文字で記述されていたようである。ゴア周辺では、カンナダ文字でのマラーティ語が書記語として使用され、この形式は16, 17世紀になっても村落文書に用いられたという話もある(児玉 2002)。ゴアにやってきた宣教師たちは、現地の人々に話され

ている言語をコンカニンConcanim,あるいはカナリンCanarimと呼んでいた。なお、現代の言語学における系統樹では、コーンクニー語とマラーティ語はインド・ヨーロッパ語に分類され、文法、語彙ともかなり共通性がある。それに対し、カンナダ語は、タミル語やマラーヤラム語と同様に南インドのドラヴィダ系の言語である。

4.2 フランシスコ会

フランシスコ会は、ゴア島とバルデズ郡での布教を委任され、1555年、レイシュ・マゴス Reis-Magosに修道院を建設した。この修道院は、聖ジェロニモ神学校へと発展し、1593年頃にはコーンクニー語がカリキュラムの一環として教えられていたという。17世紀初頭には、フランシスコ会系でコーンクニー語を教える場所は4ヵ所あった。上記のレイシュ・マゴスの聖ジェロニモ神学校、セルラ Serulaの学校、オールド・ゴアの聖フランシス・アッシジ修道院と聖ボナヴァンチュール学院である。上記のコーンクニー語教授のための機関は、16世紀後半に整備され始めた。これは、1567年3月23日にパイアス5世が、教区司祭となる聖職者は布教地の言語を話せる必要がある、との命を出したからだと考えられる。この命令が徹底されるには、しばらく時間が必要であったが、ゴアでは1592年に開かれた第4回教会会議で、教区司祭になるためには現地語の知識を持つ必要がある、との決定がなされた (Pereira 1982: 12-14)。

フランシスコ会宣教師で現地語研究に重要な役割を果たしたのは、ガスパール・デ・サム・ミゲール Gaspar de Sam Miguel神父である。彼はポルトガル生まれで、インドに渡って来た後、オールド・ゴアでコーンクニー語とマラーティ語を学んだ。彼の生涯に関する情報は少ないものの、17世紀前半に教義関係と言語関係の本を13冊著したとされている (Ibid: 16-25)。教義関係では、教区司祭が信者にキリスト教の教義を伝えるのを助ける教材である『教区司祭と修道院長のためのマニュアル (Manual para os Parochos e Reitores)』、『司祭の杖 (Baculo Pastoral)』を含む3冊がある。また、彼は子供たちや文盲を対象とした『7秘蹟に関して (De Septem Sacramentis)』を著した。そのほかに、ポルトガル語やスペイン語からの翻訳があり、『グラナダのルイス修道士の信条 (Symbolum Fratris Ludovici Granatensis)』(リスボンで出版されたルイス修道士の『キリスト教の教義』(1559年)と『教義信仰への入門』の翻訳)、『ベラルミン枢機卿の信条 (Symbolum Cardinalis Bellarmini)』(ベラルミン枢機卿の『キリスト教の教義の豊かな言明』の翻訳で、1598年に出版された)がある。現地人の慣習についても書いており、『ジェンティルの生活 (De Vitis Gentilium)』というタイトルで出版された。言語関係では、『コーンクニー語・ポルトガル語、ポルトガル語・コーンクニー語語彙集』と『カナリン語(コーンクニー語)の文法 (Arte da Lingoa Canarim)』があり、後者は後で述べるイエズス会士のトーマス・スティーブンスの文法書よりも優れたものとされている (Sardessai 2000)。

4.3 イエズス会

イエズス会士でゴアに最初にやって来たのは、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルで、1542年のことであった。しかし、彼はゴアにはあまり留まらず、現地語のコーンクニー語やマラーティ語に対する貢献は行っていない。小さなキリスト教要理をタミル語で書いたと言われている (Pereira 1982: 29)。

イエズス会は、自身の教育機関として1541年にミゲール・ヴァズ Miguel Vazとディオゴ・デ・ボルバ Diogo de Borba 両神父が総督に要請して、オールド・ゴアに聖パウロ学院を設置した。この学院は基本的に、アジア・アフリカの様々な地域から聖職者になるためにやって来た人々の教育機関であり、現地語の研究の場ではなかった。現在のムルマガオ郡とサルセテ郡を布教地域として割り当てられたイエズス会は、神学の教授と現地語研究のための機関として、マルガオ Margao にサルセテ学院を建設し、学院は1610年にラーチョール Rachol に移された。また、チョーラオ島 Choraol にも聖ジェロニモ学院が1558～1560年の間に建てられ、コーンクニー語の教授がなされた (Ibid: 31-34)。

イエズス会士で本格的に現地語を習得し、様々な本を出版したのは、英国人のトーマス・スティーブンス Thomas Stephens (1549-1619年) である。彼は、ウィルトシャーのブストンに生まれ、1575年にイエズス会士となり、1579年10月24日にゴアに到着した。彼は主にイエズス会の布教地域サルセテ郡に基盤を置き、サルセテ学院 (最初にマルガオに設立、後にラーチョールに移動) の学院長となってゴアの現地語であるマラーティ語とコーンクニー語の研究を続けた。

1616年に『イエス・キリスト、我々の救世主の世界への到来に関する対話 (Discurso sobre a vinda de Jesus Christo nosso salvador ao Mundo dividido em dous Tratados)』を出版した。これは、インドの神の物語プラーナ (purana) を、キリストを主人公にして翻案したもので、マラーティ語にコーンクニー語の単語を混ぜて書かれたものである。一般的に『キリスト伝 (クリスタ・プラーナ) (Krista Purana)』と呼ばれ、1649年と1654年の2回にわたって版が重ねられた。この本ではマラーティ語が使用されているものの、文字はローマ字である。これには、活版印刷用にインド文字の活字を作るのが困難だったという技術的な理由が挙げられる (Sardesai 2000: 38)。また、スティーヴンスは、キリスト教の教えを説いた『キリスト教要理 (Doutrina Christam)』をコーンクニー語で著した。彼は、最初のコーンクニー語の文法書、『カナリン語 (コーンクニー語) の文法 (Arte de Lingoa Canarim)』の著者でもある。それぞれ、彼の死後の1622年、1640年にラーチョールで印刷・出版された⁸⁾。

スティーブンスの死後、同じイエズス会士でディオゴ・リベイロ Diogo Ribeiro (1560-1633年) がスティーブンスの『キリスト教要理』を発展させ、『イエズス会のベラルミン枢機卿と他の著者の著作から収集されたキリスト教要理の宣言 (Declaração da

Doutrina Christam Collegida do Cardeal Bellarmino da Companhia de Jesus e Outros Autores.』として1634年にコーンクニー語で出版した。彼はまた、1626年に2巻からなるコーンクニー語の語彙集を出版している⁹⁾。スティーブンスとリベイロの他に、エティエンヌ・ド・ラ・クロワ Etienne de la Croix (1579-1643年)、アントニオ・デ・サルダニャ Antonio de Saldanha (1598-1663年)、ジョアン・デ・パドロサ João de Pedrosa (1616-1672年)、ミゲール・デ・アルメイダ Miguel de Almeida (1604-1683年)、イタリア人のイグナチオ・アルチャモネ Ignazio Archamone (1615-1683)の名が、現地語研究を行ったイエズス会士の名としてあげられる (ibid: 49-62)。

以上に列挙した宣教師たちは、現地の話し言葉であるコーンクニー語の研究に身を捧げた。重要なのは、彼らが文法書や布教に必要なキリスト教要理を作成する際に使用した文字がローマ字アルファベットであったことだ。ローマ字の使用は、確かにインド文字を活字にして印刷することが困難であったという16世紀当時の技術的問題に端を発していただろう。だが同時に、ポルトガル植民地時代に現地語を下位に位置づける言語ヒエラルキーが形成されていたことを忘れてはならない。ゴアにおける植民地行政言語はポルトガル語であり、土地記録等の公文書は全てポルトガル語で記された。1764年には、現地人にポルトガル語を学ぶことを強制し、3年以内にポルトガル語を習得できなかった人々には結婚の権利がないとする布告が出された。現地語、つまり、コーンクニー語とマラーティ語がポルトガル政府によって書記語として積極的に用いられることはなかったのである。現地語は、ポルトガル語に従属する言語として植民者側の視点から理解され、筆記された。

更に、ポルトガルと後にインド帝国を作り上げたイギリスの言語政策の明確な差異に注意を払う必要がある。つまり、ポルトガルはゴアにおいて、現地語を深く理解し、植民地統治の道具とすることがなかったのである¹⁰⁾。これには、ポルトガルが支配下においたのが点在する港湾都市に限られており、現地人を組み込んだ支配のための官僚システムを形成することができなかったというのが理由としてあげられる。確かにフランシスコ会やイエズス会の宣教師の多くが現地語研究に励んだものの、その成果がどの程度、現地の人々への対応にフィードバックされていたかは疑問である。おそらく、ゴアのキリスト教徒の間では、筆記のためではなく、口頭での説教の言葉としてコーンクニー語は認識されるようになったと考えられる。ゴアにおける初等教育は、1841年にポルトガルの新教育政策が実施されるまで整備されておらず、一般のキリスト教徒が読み書きを習うようになるのは、19世紀後半になってからである、というのもこの推測を裏付ける材料の一つである (Varde 1977: 8)。その動きと足並みを合わせ、ローマ字筆記のコーンクニー語による最初の定期刊行物がボンベイ (現在のムンバイ) で1892年に「オ・コンカニ *O Concani*」として刊行された。ゴアにおいてローマ字コーンクニー

語の刊行物が現れるのは、それから40年ほど遅れた1930年代になる¹¹⁾。

結局、ポルトガル本国でのポンバル侯の改革により1761年にイエズス会が追放された後、1852年にポルトガル植民地政府官僚であるクーニャ・リヴァラ Cunha Rivaraが『コーンクニー語の歴史に関するエッセイ (Ensaio Historico da Lingua Concani)』を著すまで、ゴア内でのコーンクニー語研究は中断されることとなった¹²⁾。19世紀以降のコーンクニー語研究は、ベンガルにおけるセランポール・ミッションのウィリアム・ケアリなどの言語研究の中でも大きな位置を占め、そこではコーンクニー語が言語系統樹のどこに位置するかがマラーティ語との関係で議論されるようになった(児玉 2002)。このイギリスの植民地支配統治の技法としての言語研究の中でコーンクニー語がどこに位置づけられたのか、という一連の試みは、現在のコーンクニー語標準化問題に大きく関わっている。しかし、本稿では、紙幅の制限のためこの問題については論じない。ゴアにおける16~17世紀のカトリック宣教師たちの現地語研究が重要なのは、コーンクニー語のローマ字アルファベット表記がキリスト教徒の間で根付く契機を与えた点にある。そのローマ字筆記の様式は現代にも引き継がれ、発音の上でも、筆記の上でも「教会コーンクニー語」と呼べる領域を形作る上での基礎となった。

5 現代のキリスト教徒たちとコーンクニー語

5.1 キリスト教徒たちの言語使用状況

現在のゴアのキリスト教徒たちの言語使用状況は、かなり複雑な状況を見せている。ゴアの日常生活において、環言語(リンク・ランゲージ)は、コーンクニー語である。周辺地域からゴアに流入してきた人々も、コーンクニー語を用いることが多い。また、後述するように教会関係の諸活動はコーンクニー語である。しかし、ポルトガル植民地時代に教育を受け、ポルトガル文化に自己を同一化させた高カーストのパモンやチャルドの人々は、現在でもコーンクニー語を召使と喋るときの言葉、「キッチン・ランゲージ」と考えている¹³⁾。そのようなカーストで50歳代後半以上の人々は家庭内でポルトガル語を使用し、それより若い世代の人々は英語に言語転換を行っている(事例1・2)。また、ゴア以外(ムンバイなど)から戻ってきた人々は、コーンクニー語で教育を受けていないため、日常生活では英語が主体であり、市場などで使用する生活に最低限度必要なコーンクニー語のみを身につけている(事例3)。

事例1 JL一家(チャルド)

夫のJは76歳、妻Tは65歳(2001年当時)、双方ともにチャルドに属する。息子二人に娘が一人いる。長男(40代)はドゥバイで日刊紙の副編集長をしており、妻と娘(5歳)とともにアラブ首長国連邦に10年以上住んでいる。次男(30代前半)、長女(30代後半)

ともに結婚している。次男には娘が一人、長女には息子(15歳)と娘(8歳)がいる。J、妻のTの二人の会話はコーンクニー語である。また、JとTが自分の子供たちに喋りかけるのもコーンクニー語である。ただし、Tの両親は家族の中で英語を喋る方針であったため、T曰く、「自分はコーンクニー語がへたである」ということだ。彼女は英語を教授語とする初等教育、中等教育を受け、修了試験に合格した後、ティスワディ郡の中学校¹⁴⁾で英語を教え、3年前に退職したばかりである。彼女は買い物の際には主にコーンクニー語を用いるが、教会の集まりなどのより公的な場では英語を喋る。他の人々がコーンクニー語を喋っている場合も英語で発言を行うことが多い。Jは、ポルトガル植民地時代に神学校で高等教育を受けたため、ポルトガル語が堪能である。神父や同年代のキリスト教徒に会う時には、必ず“Bom dias, como esta?”(ごきげんいかが)とポルトガル語で話しかける。彼らの長男Aの妻Eは、コーンクニー語を喋らない。よって、夫婦の会話は英語であり、娘も英語が母語である。それに対し、次男の娘はコーンクニー語を喋る。長女Bは、夫とコーンクニー語で喋る。長男にはコーンクニー語と英語を混ぜ、長女には英語で話しかける。Bによれば、長男は以前隣家に住んでいた人と喋ったせいで、コーンクニー語がうまくなった。長女に対しては家族の皆は英語で話しかけ、彼女も英語で答える。とはいうものの、長女は小学校でデーヴァナーガリー文字によるコーンクニー語の読み書きを勉強している。

事例2 RJ(20歳代前半の女性、おそらくチャルド)¹⁵⁾

パナジ市出身の彼女は、2000年にM村のIJと結婚した。カレッジを出てからすぐのことである。実家では両親、兄弟姉妹に対して英語で喋っていた。夫は家の中でコーンクニー語を喋るが、自分は夫との会話も含め、全て英語である。

事例3 SEと妻のLE(チャルド)

夫のSEはM村の出身であり、妻のLEは隣村のR村の出身である。SEは、6歳の頃に父親の仕事の都合でボンベイ(現ムンバイ)に移り、最初はイエズス会系の学校に行った。そしてカレッジまでボンベイで高等教育を受けた。その後もゴアには戻らずに、ボンベイで就職した。ゴアに戻ってきたのは、退職後のことである。一方、LEの母親は修道院で教育を受けた。その影響もあってか、家では英語を話した。LEの教育も英語を教授語とする学校であった。SE・LE夫婦の会話は今も英語である。LEは、買い物やお手伝いの女性に話すときはコーンクニー語を用いるものの、それ以上の込み入った会話はできない。

以上の事例で見たように、高カーストとしてのステータスを示すためにコーンクニー語を話さない、あるいはゴア外で育ったために話せない人々の数は、ゴアのキリスト教

徒の中でかなりの数に上る。しかし、コーンクニー語を使用せず英語を家庭内で喋る人々も、ゴア教会の方針のため、教会の領域ではコーンクニー語を用いざるをえない状況となっている。その結果、「教会コーンクニー語」は、ゴアのキリスト教徒にとっての象徴的地位を得ている。以下では、教会における「教会コーンクニー語」の領域、つまりコーンクニー語の使用状況について見ておきたい。

5.2 教会コーンクニー語

教会においてコーンクニー語は常に使用されてきたものの、ミサにおいて典礼・聖歌など全てがコーンクニー語で執り行われるようになったのは、1970年代になってからのことである。第2ヴァチカン公会議（1962～65年）で典礼の現地語化が奨励されたことが大きな契機であった。50歳代以上のインフォーマントの何人もが証言しているように、それまでは説教以外は全てラテン語で行われていた。司祭は現在のように信者たちの方を向くのではなく、信者に背を向けてミサを執り行っていた。ラテン語で読まれた聖書の一部分をコーンクニー語の説教で易しく解説するという形であった。

ゴア教会においてコーンクニー語化が最初に進んだのは聖歌であり、1967年に最初の聖歌集が出版された（Goychi Sevadhormik Somiti 1995）。1968年には、4人の神父を構成員とするゴア典礼委員会（Göichî Sevadhormik Somiti）が新約聖書のコーンクニー語訳に取りかかった。これは完成までに6年かかり、1974年に出版されている（Göichî Sevadhormik Somiti 1974）。続いて旧約聖書のコーンクニー語への翻訳が行われ、2002年に終了した。この過程で教会コーンクニー語の正書法が確立され、デーヴァナーガリー文字表記とは異なる様式が固定化された。例えば、ローマ字表記の場合、デーヴァナーガリー文字のअ (a) の音はoで、आ (ā) がaで示される。更に、ओ (o) の音を示すときにはôが使用される。ただし、ゴア典礼委員会ではなく、キリストの典礼教育研究所が編集する日曜学校用の教材ではअ (a) と ओ (o) の両音ともにoのアルファベットが使用されており、完全な正書法の確立とまでは至っていないようだ¹⁶⁾。新約・旧約聖書の翻訳に際しては、表記に加えて語彙に関する変更が加えられ、サンスクリット語起源の語彙が多く採用された。文体については、数あるコーンクニー語方言の中でもバルデーシー（バルデズ郡で使用されているコーンクニー語）が基本となっている。

このようにしてローマ字表記による教会コーンクニー語の聖書、聖歌集、日曜学校の教材が揃ったことにより、ゴア各地の教会では、コーンクニー語によってミサが執り行われている。日曜学校で子どもたちにキリスト教の教えを伝達する際に用いられる教材も全てコーンクニー語である（図2）。更にキリスト教の教えを伝える聖書や教材に限らず、教会がカバーする領域で用いられているコーンクニー語は大抵がローマ字で筆記されている。たとえば、筆者が調査を行ったティスワディ郡（ゴア島）のM村教会



図 2

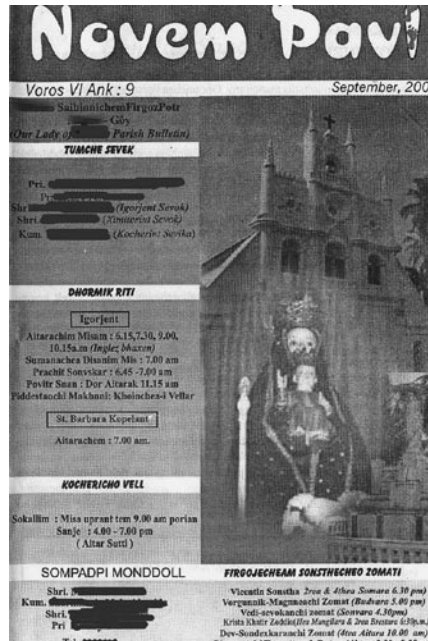


図 3

の月報にもローマ字コンクニー語が使用されている（図3）。

しかし、教会におけるコンクニー語化の推進が行われる一方で、近年ゴアのキリスト教徒の間では子どもの将来を考え、家庭の言語を英語にする人々が増えている。このような状況に危機感を感じる神父たちは、コンクニー語を使用することの重要性を懸命に説いている。M村教区司祭のA神父は、以下のように筆者に語ったことがある。

MGという女性がもうすぐ結婚する。彼女は素晴らしい女性で、コンクニー語をよく知っている。コンクニー語が好きなんだね。花婿も同じだ。しかし、彼女の母親がある日花婿の母親と教会にやって来た。何かと思えば、結婚式では英語でミサをあげてほしいという頼みであった。なぜか、と問いかけると、親戚の多くが外国からやって来るから、コンクニー語のミサだと彼らは理解できない、というのがその理由だった。

A神父は、結婚はカップルにとって重要であるから、カップルが理解できればよい、という理由でその頼みを受け容れなかった。そうすると、母親たちはどうしても英語ミサをM村で挙げられない場合は、花婿は他の教会で結婚することも考えていると言った。A神父は、MGと花婿を呼んで、自分が英語ミサをやらない理由を話した。A神父は、筆者に「決定はカップル自身の手にある」が、「彼らは、コンクニー語を理解しない親戚のことばかりを気にしている。英語を理解しない人々のことは考えないのだろうか」と筆者に問いかけた。彼は、カップルがコンクニー語を理解しない時は英語ミサ

をやるのに異議はないという。問題は、人々が英語をステータス言語と考え、コーンクニー語を台所のみで話されていた（つまり、召使との会話で使用する）言語であると軽視しているところにあるというのだ。「ゴア人は世界で唯一自分の言語を恥ずかしいと考えている人々だ」¹⁷⁾。

以上に述べたように、ゴアのキリスト教徒の宗教的アイデンティティの核とでもいえる教会では、ローマ字で筆記される「教会コーンクニー語」が支配的である。英語の会話・読み書き能力なしでは就職機会がないという状況から、近年はますます英語を重要視する人が増加する中で、ゴア教会は「教会コーンクニー語」を頑なに守っている。第2ヴァチカン公会議から既に40年経った現在、ローマ字筆記のコーンクニー語を教会の領域で使用し、その他は英語であるという人々の数も多くなってきている。このローマ字で筆記されるという視覚的イメージは、ポルトガル語や英語というヨーロッパ起源の言語の筆記された形と重なってキリスト教徒の言語アイデンティティを形作っていると考えられる。それでは、次にその「教会コーンクニー語」が近年ゴアで知識人を中心に起こっている「州公用語としてのコーンクニー語」の標準化の動きとどのような関係にあるのかを見ていこう。

6 公用語としてのコーンクニー語とキリスト教徒

現地語のコーンクニー語は、現在ではゴア州の公用語となっている。前節で述べた「教会コーンクニー語」は、現在は州となったゴアの公用語としてのコーンクニー語に対して周縁的な領域を形作っている。教会コーンクニー語がローマ字で筆記されるのに対し、公用語令はヒンディー語やサンスクリット語を筆記するのにも使用されるデーヴァナーガリー文字を正式な文字として定めているからだ。本節では、最初に州公用語としてコーンクニー語が規定されるようになった歴史的背景を押さえ、次にコーンクニー語を標準化・普及させることを目的とした諸機関の活動を分析することで、「教会コーンクニー語」の現代ゴアにおける位置づけを明らかにする。

6.1 コーンクニー語の州公用語化の問題

コーンクニー語の州公用語化は、1980年代になって大きな問題となった。これは、1961年にゴアがポルトガルから解放されてすぐに起こった、隣州マハーラーシュトラ州への編入という政治的問題とも関わっている。この問題において、編入に賛成のヒンドゥー教徒の低カーストとマハーラーシュトラのブラーマンが手を結び、編入に反対のキリスト教徒とサラスワット・ブラーマン（ゴアのブラーマン）に対立するという構図があった。しかし、結局は1967年の住民投票で反編入派が僅差で勝ち、ゴアは連邦直

轄地のステータスを保ち続けることになった。ここで重要なのは、キリスト教徒にとってコーンクニー語が教会の言語として確立するのと同時期に、マハーラーシュトラ州への編入問題が起こったことである。キリスト教徒にとって、コーンクニー語は、マハーラーシュトラ州（＝インド化あるいはヒンドゥー教化）には取り込まれない自分たちの宗教的アイデンティティの象徴となったと考えられる。そして、キリスト教徒たちは、ゴアの独立性と自分たちの宗教的アイデンティティを重ねて、マハーラーシュトラ州への編入に反対の票を投じたといえる。

住民投票の結果、ゴアは連邦直轄地のまま1980年代を迎えた。次に政治的に問題となったのは、ゴアの連邦直轄地から州への政治的ステータス格上げの問題であった。州となるためには州公用語を定める必要があり、コーンクニー語とマラーティ語のどちらを取るかが問題として浮上した。コーンクニー語は上述したように、日常生活で支配的なゴアの環言語（リンク・ランゲージ）である。とはいうものの、ゴアのヒンドゥー教徒の間の書記語であり、政治・宗教・文学の言語として使用されてきたマラーティ語を「ゴアの言語」と認識する人々は多かった。これは、ポルトガルが16世紀に強制改宗を進めたとき、改宗を拒否したヒンドゥー教徒たちが新征服地へと逃れ、現在マハーラーシュトラ州である地域と文化的な繋がりを強めたことに原因がある。新征服地のヒンドゥー教徒の間では、マラーティ語が文学・宗教のための言語として認識され、コーンクニー語は話し言葉であるという認識があった。また、解放以降のマラーティ語による初等教育の村落部への普及により、ヒンドゥー教徒の諸低カースト（バフジャン・サマージ¹⁸⁾の間にはマラーティ語こそが正当な言語であり、コーンクニー語はマラーティ語の方言であるという考えが広まっていた。当時のゴア首相プラタプシン・ラーネ Pratapsingh Raneはヒンドゥー教徒、特にバフジャン・サマージの支持を受けて政府を組織していた。よって、支持基盤の人々の意志に逆らってコーンクニー語を州公用語と定めるのは難しい状況であった。

このような状況下、マラーティ語が公用語とされるのではないか、という危機感から1985年にコーンクニー語を州公用語とする運動が始まった。中心となったのは、ヒンドゥー教徒のコーンクニー語作家たちである。その中の一人、プンダリーク・ナイク Pundalik Naikが中心となり、主要メンバーが作家である、「コーンクニー人民の声」（Konkani Porjecho Awaz, 以下KPA）が結成された¹⁹⁾。このKPAを中心に1985~86年にわたってデモ行進や集会在が組織され、政府に対してコーンクニー語を公用語と定めた州公用語令を出すよう運動が行われた。それに対してマラーティ語支持の文学者たちは「マラーティ語を州公用語とする委員会」（Marathi Rajya Bhasya Prastapanan Samiti, 以下MRBPS）を中心に対抗する運動を展開した²⁰⁾。

キリスト教徒たちは、ヒンドゥー教徒のコーンクニー語作家たちの側に立ち、コーンクニー語を州公用語とするための大きな力となった。KPAのミーティングは教会で行

われることが多く、神父たちはミサでKPAのデモに参加するようにキリスト教徒たちに呼びかけた。「マラーティ語が公用語になってしまうと、教会に（ドレスではなく）サリーで来ることを強要される」といったシンボリックな言い方がなされたという²¹⁾。

結局、1987年2月4日に公用語令が出され、コーンクニー語がゴア州公用語として定められる。しかし、マラーティ語も同様に「いかなる公的目的のために用いてもよい」という一文が入ったため、ゴア文化と言語の問題は解決されるに至らなかった。そのため、筆者が調査に入った2000年4月の時点でも「ゴアの言語はどちらか」という問いが度々新聞紙上で議論されていた。また、州公用語のコーンクニー語はヒンディー語やマラーティ語と同様にデーヴァナーガリー文字で筆記されることが決定されたため、ローマ字筆記のキリスト教徒の「教会コーンクニー語」は同じコーンクニー語でありながら、州公用語とは異なる領域を形づくるようになっていく。

6.2 コーンクニー語研究機関とその活動の現在

この節では、1987年の州公用語令以降の、コーンクニー語とコーンクニー文学の研究・普及活動に関わっている諸組織の活動を概観する。州公用語令で定められたのは、デーヴァナーガリー文字で筆記されるコーンクニー語であり、様々な研究機関の活動の中で、ローマ字で書かれるキリスト教徒の「教会コーンクニー語」は、周辺に追いやられる状況になっている。

コーンクニー言語協会 (Konkani Basha Mandal)

コーンクニー言語協会は1936年に設立された。2001年現在の協会長はダモダール・マウゾ (Damodar Mauzo) 氏である。マルガオ市郊外に協会の建物があり、コーンクニー語文献を集めた図書館を持つ。また、15年ほど前にコーンクニー語で教える小学校を始めた。

主な活動はコーンクニー語の研究、出版活動、様々なイベント組織の3つである。コーンクニー語標準化のために言語の専門家を招いてワークショップを行っている。出版活動については、「コーンクニー語文学の父」シェノイ・ゴエンバブの作品集や伝記の出版を行ってきた。文化的イベントとして、ゴエンバブ生誕日を祝う集会、若者祭 Yuva Mahotsavなどを開催している。また、デリーのインド国立文学アカデミー Sahitya Akademi と共催で地域語による文学間の交流のためのワークショップも行っている²²⁾。

ゴア・コーンクニー・アカデミ (Goa Konkani Akademi)

ゴア・コーンクニー・アカデミ (以下アカデミ) は、言語問題がアジテーションとして噴出してくる直前、1984年12月に政府により設立された。設立当初はパナジ市にあ

り、1999年にボンダ郡の小村ボリム Borimに移ったものの、2003年に再びパナジ市に戻された。初代所長は、故人であるプルショッタム・カコドカール Purshottam Kakodkar氏である。彼は国民会議派の政治家であり、コーンクニー語支持であった。政府との折衝を繰り返し、アカデミ設立にこぎつけた。

アカデミの目的はコーンクニー語とコーンクニー文学の発展に寄与することである。そのために (1) 言語学部門 (2) 辞書編纂部門 (3) 音楽部門 (4) 民俗部門 (ゴアの習俗の収集と保存) (5) 文学部門 (ワークショップの開催やデーヴァナーガリー文字によるコーンクニー語書籍の出版に対する資金援助など) (6) 教育・文化部門 (コーンクニー語の伝統歌謡・舞踊普及のためのプログラム開催や教師のトレーニングなど) の6部門が設けられており、研究員が雇用されている。

2001年9月現在、コーンクニー言語協会と共同で、学生対象のコーンクニー語能力試験を制度化する準備を進めている。5年生、8年生、10年生、12年生の4レベルになる予定である。12月からコーンクニー言語協会にて試験のためのコースが開催される手はずとなっている。試験の主催はアカデミの担当となる予定である²³⁾。

ゴア大学コーンクニー語学科 (Konkani Department, Goa University)

ゴア大学は1985年に設立された。系列カレッジで学士号を修めた学生のため、修士・博士課程の諸コースを提供している。パナジ市郊外のタレイガオ台地にキャンパスは位置する。自然科学、社会科学、人文科学合わせて22学科とラテン・アメリカ研究センター、女性学センター、大学科学計器研究センターがある (Macedo 1997)。

コーンクニー語学科は、英語学科、フランス語学科、ポルトガル語学科、ヒンディー語学科、マラーティ語学科とともに言語学部に属する。2001年現在のスタッフは4名で、16世紀のコーンクニー語研究の専門家であるオリヴィーニョ・ゴメーシュ Olivinho Gomes博士が学科長であり、その下に3名の講師がいた。修士・博士課程の両方があり、修士課程には毎年20名強が学んでいる。「コーンクニー語とコーンクニー文学の歴史」、「近代コーンクニー語散文」、「近代コーンクニー語詩」、「コーンクニー語の言語学的研究」といった科目が開講されている。提出課題や修士論文のために使用される文字はデーヴァナーガリー文字である。

2000年にコーンクニー語学科の中にコーンクニー開発センター Konkani Development Centreが設立された。学科長がセンター長を兼ね、講師が一人いる。筆者が調査に入った2000年4月時点では、非コーンクニー語話者のためのコースを準備中であった。このコースは、筆者がゴア大学を再訪問した2002年8月には既に開講されていた。主にゴア大学関係者向けに大学ゲストハウスで週一回行われているということであった。参加者は大学スタッフの妻たちで、買い物などの日常生活での必要というのが受講の主な動機である。15人程度が随時参加しているという。使用テキストの文

字は、やはりデーヴァナーガリー文字であった。

ゴア大学には、コーンクニー語学科以外にもコーンクニー語関係者が働いている。例えば、学生福利厚生・文化・スポーツ活動部門の責任者であるH博士はコーンクニー作家であり、熱心な活動家である。また、英語学科の上級講師B博士はコーンクニー文学批評家であり、月刊誌ゴア・トゥデイ *Goa Today* にコーンクニー文学関係の記事をほぼ毎月寄稿している。人文科学系以外にもコーンクニー語関係者がおり、例えば植物学者のN氏はコーンクニー語擁護の記事を主にゴアの英語新聞ナヴヒンド・タイムズ Navhind Times に寄稿している。

以上に挙げた3組織に属する人々のほとんどは、自分自身コーンクニー語で書く作家であり、知識人であると言える。彼ら・彼女らは、様々なワークショップ、イベントで交流し、狭いサークルを形成している。そして、この3組織とその活動に携わる人々は、主にゴア内部でのデーヴァナーガリー文字によって筆記されるコーンクニー語の普及を目指している。

トーマス・スティーヴンス・コーンクニー・センター (Thomas Stephens Konkani Kendra)

トーマス・スティーヴンス・コーンクニー・センター (以下TSKK) は、イエズス会により運営されるコーンクニー語の研究センターである。その名称はインドに最初にやって来たイギリス人イエズス会士、トーマス・スティーヴンスから取られている。1980年にパナジ市のミラマール地区に設立された。センターの目的は、「コーンクニー語、文学、文化の科学的研究と普及」である²⁴⁾。2001年にパナジ市郊外ボルヴォリムに新センターが完成し、引っ越した。隣接地には同じくイエズス会経営のポルトガル・インド史研究の中心機関の一つ、ザビエル歴史研究センターがある。新センターには図書館が完備されており、蔵書は約12,000冊にのぼる。コーンクニー語関係、コーンクニー文学、コーンクニー語民間伝承のみならず、インド文化、宗教、哲学などの蔵書がある。カルナータカ州のマンガロールやムンバイで出版されている雑誌も揃っている。図書館の他にコーンクニー語コースを行うための教室、研究スペース、住居スペースなどがある。

センターの常勤研究者はイエズス会士の2人、センター長(当時)のマシュー・アルメイダ神父 Matthew Almeidaと副センター長(当時、現センター長)のプラタプ・ナイク神父 Pratap Naikである。両者ともに言語学の博士号を取得している²⁵⁾。その他のスタッフは、秘書と図書館の司書、リサーチ・アシスタントが1人(2001年5月現在)である。

センターの活動は、主に研究と教育の2分野で行われている。研究では、コーンクニー語の文法、コーンクニー語の正書法・教授法の2点に重点が置かれている。アルメ

イダ神父の博士論文「コーンクニー語の記述」(*A Description of Konkani*)がTSKにより出版されている。1991年にゴアの現地語、つまりコーンクニー語かマラーティ語で授業を行わない小学校に対して政府は補助金を出さないことを決定し、その結果コーンクニー語での授業を行う小学校が急増した。1987年にデーヴァナーガリー文字によるコーンクニー語が州公用語として認定されたものの、2001年の時点では未だ標準化には程遠い状況にあった。その原因として、キリスト教徒はコーンクニー語を書くのにローマ字を用いるという表記の問題がまずあった。それに加え、コーンクニー語内でも地域により方言の幅が広く、どのヴァリエントを標準語として用いるか、どの語彙を標準語の中にもめるかという問題があった。標準語が何か定まらない中でも、コーンクニー語での教授を進めなくてはならない状況にあり、TSKKでも現在に至るまで教授法の研究が進められている。これまでにナイク神父による『教師と親のためのマニュアル (*Teacher's and Parent's Manual (Scientifically prepared manual to teach the Konkani primer)*)』が出版されている。また、詩人でもあるナイク神父が作詞した子供向けの曲を集めたカセットのリリースも行っている。出版活動において、両神父の研究成果のみならず、他のコーンクニー語研究者の研究発表の場を提供するという目的で、2000年から雑誌*Sôd*の発行が始まった。

センターはゴア大学と同様、コーンクニー語の若手研究者に対する指導を行っている。ただし、教育活動の軸となっているのはコーンクニー語コースの開催である。2001年には、コーンクニー語基本コースが初級と中級の2グループに分けて実施された²⁶⁾。その他には、カンナダ文字でコーンクニー語を筆記するためのコースがTSKK主催によりカルナータカ州ベルガウンで開催された。ナイク神父が出張し、当地のイエズス会士に教授した。コーンクニー語関係ではないが、環境研究コースも開講された²⁷⁾。

ゴアの州公用語がデーヴァナーガリー文字のコーンクニー語に定められて以来、TSKKの研究活動も主にデーヴァナーガリー文字中心になっている。しかし、TSKKはイエズス会経営の機関だということもあり、ゴアのコーンクニー語の完全なデーヴァナーガリー化を目指すヒन्दゥー教徒の作家たちとはスタンスが少々異なる。ローマ字筆記の教会コーンクニー語も認めた上で、若い世代がデーヴァナーガリー文字で読み書きできるように支援するとう立場であるようだ²⁸⁾。これは、アルメイダ神父、ナイク神父ともにカルナータカ州マンガロール出身であり、「ゴアのコーンクニー語」というアイデンティティ・ポリティクスに囚われていないからかもしれない。それに対し、コーンクニー言語協会、ゴア・コーンクニー・アカデミ、ゴア大学が主催する活動の中心であるコーンクニー作家たち、コーンクニー語支持のジャーナリストたちが考えるコーンクニー語には、「教会コーンクニー語」の視点が抜け落ちている。彼ら・彼女たちが再生産する言説には、キリスト教徒の話すコーンクニー語はヒन्दゥー教徒のものに比べて劣っているという意識が暗に示されていることがある²⁹⁾。

筆者がコーンクニー語を修得する目的で、2001年4月17日～5月15日の間に行われたコーンクニー語基本コースの初級を受講したときの参加者16人のうち、ほとんどが教会関係者であった。5人がムンバイの神学校で学んでいる学生、4人がイエズス会士、他にはゴア内の子ども関係の施設に派遣されているタミル・ナドゥ州出身の神父と修道女、カルナータカ州ベルガウンで宣教活動を行っている神父であった。

コースに用いられたテキストはアルメイダ神父の『コーンクニー語基本コース (Konkani Basic Course)』である。コーンクニー語のテキスト部分はデーヴァナーガリー文字で書かれており、説明は英語でなされている。よって、このコースの受講最低条件は、デーヴァナーガリー文字を読める能力であった。ゴアの州公用語としてデーヴァナーガリー文字のコーンクニー語が定められているため、それに従った形であるといえる。最初の2週間は英語による説明があったものの、それ以降の説明は、ほぼ全てコーンクニー語でなされた。基本的にテキストの文章を読み、文法を学ぶ形で授業は進められた。その他にグループでの自由会話形式のレッスン、ディクテーションの練習もあった。

筆者と同じグループになったムンバイの神学生3人に話を聞いたところ、それぞれ、ゴア、マハーラーシュトラ、ケーララ出身であった。ケーララ州出身のNはコーンクニー語が母語であるため、会話に不自由はないものの、文法をきちんと学ぶという意味でこのコースに参加したという。興味深いのは、ゴア出身のJは家での会話は英語でありコーンクニー語をほとんど話せないという点である。デーヴァナーガリー文字を読むのにも難があり、単語を覚えるのに苦労していた。マハーラーシュトラ州出身のMの場合は、マラーティ語で教育を受けたのでデーヴァナーガリー文字に慣れており、テキストを読むのに問題はなかった。

この3人の状況は、コーンクニー語の現状をよく示しており興味深い。近年、ゴアのキリスト教徒の中には子供に英語で喋りかける人々が増えている。Jのようにゴア出身でありながら、コーンクニー語を話せない人々がいる所以である。彼らは教会でコーンクニー語を使用しているものの、それは日常会話とは異なる上、ローマ字で筆記されているため、デーヴァナーガリー文字に親しんでいない場合は公用語のコーンクニー語を読みこなすことが難しい。ゴアの州公用語はコーンクニー語であり、コーンクニー語こそがゴア人をヒンドゥー教徒、キリスト教徒に関わらず結び付けるものである、という言説をコーンクニー作家たちは再生産している。だが、Nのようにケーララ州出身の方がコーンクニー語の読み書き・会話に堪能であるという捻れた現象が実際に生じている。

先にも述べたが、TSKKの活動は、コーンクニー言語協会、ゴア・コーンクニー・アカデミ、ゴア大学コーンクニー語学科と独立したところで行われている感がある。TSKKのアルメイダ神父、ナイク神父は、他の3組織の組織するイベントに積極的に

参加し、知識人サークルの中で重要な位置を占めるということはない³⁰⁾。TSKKはあくまでも、コーンクニー語の文法書を書いたトーマス・スティーブンスなどのイエズス会士の宣教の伝統に従う形で、コーンクニー語に対するポジショニングを行おうとしているのである。上述したコーンクニー語コースの参加者の半数以上が教会関係者であるという点からもそれは伺える。

以上、ゴアにおけるコーンクニー語の研究機関について概観した。この4機関の中には、ローマ字によるコーンクニー語を研究する機関はない。それはつまり、ローマ字でコーンクニー語を筆記する活動には公的助成がほとんどないということだ³¹⁾。ゴア教会は聖書や日曜学校の教材作成に関しては熱心であっても文学活動に対する積極的援助は行っていない。1987年の州公用語令によってデーヴァナーガリー文字筆記のコーンクニー語が公用語として定められて以来、ローマ字表記のコーンクニー語は宗教的領域の内部に留まっているかのようだ。発行数の多いローマ字筆記のコーンクニー語による定期行物は、先に述べた「労働者の友」に加え、月刊誌の「薔薇 *Gulab*」のみである。1970年代まではローマ字コーンクニー語による日刊紙が発行され、教会コーンクニー語以外の領域におけるローマ字表記のコーンクニー語が存在した。しかし、現在ではローマ字表記といえば、教会コーンクニー語と結び付けられる傾向がある。「薔薇」の創刊者は、ゴア教会に所属するフレディ・ダ・コスタ神父 (Freddy da Costa, 故人) であった。2004年5月にローマ字コーンクニー語で執筆活動を行う主要な作家のうちの2人、ダ・コスタ神父とフェリシオ・カルドーゾ Felicio Cardoso氏が交通事故で亡くなったのを契機に、ローマ字コーンクニー語の発展を目指すセンター (ダルガード研究所 Dalgado Institute) の整備を行おうという声が上がっている。ただし、この動きをゴア教会が本格的に支援するかはまだ分からない³²⁾。

7 おわりに

以上、現地語のコーンクニー語が、ポルトガル植民地時代にいかに宣教師によって記述され、1961年以降のポスト植民地時代において「教会コーンクニー語」としていかに教会と結びついているか、その状況を記述してきた。そして、「教会コーンクニー語」とゴアのキリスト教徒のアイデンティティが、「公用語としてのコーンクニー語」の形成・普及の動きに対して周辺の位置づけにあることを確認した。神の言葉を伝え、異教徒を「文明化」しようとする過程で、宣教師は世界各地で現地語を理解・習得しようとした。現地語によるキリスト教要理の出版、文法書や辞書の編纂の結果、それぞれの言語が宣教師の視点から対象化され、現地の人々へフィードバックされていったと言える。このフィードバックの過程には、おそらく、世界各地で様々なケースがあると考え

られる。他の地域のケースと比較した場合、ゴアは特別なのか、あるいは共通項があるのか、ということ視野に入れつつ、宣教師の文献に実際に当たり、現地語の対象化について更なる分析を行っていくことがこれから必要となるだろう。

注

- 1) 本稿に示したデータは、2000年から2006年現在まで継続中の通算約24ヶ月にわたるゴアでの現地調査に基づく。調査は、文部省（平成11年度アジア諸国等派遣留學生）、洪澤民族学振興基金（平成14年度 大学院生等に対する研究活動助成）、平成15～16年度 科学研究費補助金（特別研究員奨励費 課題番号15004539-00）の援助により可能となった。また、2002年11月～03年3月の間、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究グループ「トランスナショナリティ研究」の一環として資金援助を受けた。ここに記して関係諸機関に感謝申し上げたい。また、本稿は、国立民族学博物館共同研究「キリスト教と『文明化』の人類学的研究」研究会の発表原稿「植民地主義・宣教・言語——インド、ゴアにおけるキリスト教徒の事例」（2004年2月21日）に加筆修正したものである。
- 2) 布教保護権は、元々は司祭任命の権限が誰に帰属するのかという問題をめぐり、教会側と俗権である領主側が対立した叙任権闘争の結果、12世紀後半にアレキサンデル3世により法制度として定められた（高瀬 1993: 11-21）。ポルトガルとスペインの海外進出の際にも両国が布教の保護者として教会運営に関与するという枠組みが適用された。それを最初に認めたのは、1451年1月に出されたニコラウス5世の勅書“Romanus Pontifex”においてである（Costa 1997: 2）。これは、ポルトガルのエンリケ航海王子がアフリカ西海岸沿いに船団を派遣し、探検を進めるのと軌を一にしていた。ポルトガルの布教保護権に関しては、浜岡（2003）も参照のこと。
- 3) 他にもラファエル（Rafael 1993）が、スペインによるタガログ語の植民地化を扱っている。フィリピン支配初期に、宣教師たちはタガログ語をスペイン語の視点から一つの言語として翻訳し、支配しようとした。しかし、言語に対する支配の試みに対し、タガログ語話者たちは自身の手による辞書編纂などの形で応戦し、スペイン人の言語的支配に簡単に従うことはなかった。
- 4) ローマ字表記に従ってコンカニ語と呼ばれることも多いが、ここでは現地の発音に近いコーンクニー語を採用する。
- 5) 州議会は、バナジ郊外のボルヴォリム Porvorimに位置する。
- 6) ゴアにおける異端審問は、実質的に1774年まで続いた。その間に誰が何人ぐらい裁かれたか、という資料は紛失されてしまっており、詳しいことは分からない。しかし、ある程度の研究がこれまでに蓄積されている。（Priolkar 1991 (1961)）が詳しいので参照のこと。スペイン、ポルトガルとゴアの異端審問の間の連続性に関しては、（Matsukawa 2000）の第3章を参照のこと。
- 7) 例えば、ボンダ郡のマルセラ村 Marcelaには、ティスワディから移されたヒンドゥー寺院が20以上ある（Pereira 1978）。
- 8) 前者の『キリスト教要理』については、20世紀にポルトガルで出版されたファクシミリ版（Estevõ 1945 (1622)）が参照可能である。
- 9) デイオゴ・リベイロの語彙集を、丸山（2001）は辞書としている。彼によれば、コーンクニー

語・ポルトガル語辞書で印刷されたものの存在はこれまでに報告されていない。

- 10) 英領インドにおける言語研究の発展と植民地主義の関係については、(Cohn 1996) の第2章を参照。
- 11) 一つは、週刊紙「人民の助け *Porjecho Adar*」(1930) であり、もう一つが「労働者の友 *Vauranddeacho Ixtt*」(1933) である。両紙ともポルトガル語とコーンクニー語の二言語を併用していた。「労働者の友」は現在でもピラル修道会を本拠地とした、ゴア唯一のコーンクニー語週刊紙として発行が続けられている。
- 12) これには、1778年に大司教がポルトガル語により全ての宗教的教えが与えられるように、との命を出したことも関連していると考えられる。
- 13) ゴアのキリスト教徒は、16世紀に改宗した後も、改宗以前のカーストを保持し続けた。ただ、ヒンドゥー教徒が自己のカースト名を名乗る場合にジャーティ名を名乗ることが多いのに対し、キリスト教徒の場合はヴァルナ名をカーストとしている。カースト名はポルトガル語化し、ブラーマン(僧侶階級)はバモン Bamon, クシャトリヤ(戦士階級)はチャルド Chardoあるいはチャッディ Chaddi, シュードラ(奴隷階級)はシュディール Sudirに相当する。その下にゴアの土着民と考えられるクンビ Kunbiあるいはガウッディ Gauddi, そしてアウトカーストであるマハール Maharとチャマール Chamarが続く(D'Costa 1977)。ここまで述べた集団は、バモンとクシャトリヤが大体同等で、その下にシュディール、クンビ、アウトカーストまで、カースト・ヒエラルキーの上から下へと順番に位置づけられる。一つ位置づけが難しい集団として、製塩業を営むガウッデ Gauddeあるいはアグリス Agrisが挙げられる。これは、ヴァイシャ Vaisha(商人階級)と同等であるとも考えられるが、チャルドに含まれると主張する人々もいるために位置づけが明確ではない。シュディールの中には、椰子の樹液取り、酒造り人、大工、石工、洗濯屋、油取り、床屋、漁師、金細工師、壺造りなど全てが含まれる(De Bragança, Pereira 1991(1923): 47)。
- 14) ここで言う「中学校」とは、High Schoolである。Upper Primary School(5年生~7年生)、Secondary School(8年生~10年生)が一緒になったものである。
- 15) 彼女は、自身のカーストを明らかにしなかったが、夫はチャルドである。ゴアのキリスト教徒は今もカースト内婚を行う傾向が高い。インフォーマントの一人によれば、ティスワディ郡とバルデズ郡はバモンとチャルドの間での通婚の度合いが、サルセテに比べると高いという。ただし、この二つのカーストがシュディールと通婚することはまずないという。
- 16) 丸山(Maruyama 1997)が、トーマス・スティーブンスやその他の宣教師によるaの音の記述の変遷について書いている。それによれば、スティーブンスがギリシャ語のαをaの音に与えていたのが、時代が下るにつれ、アルファベットのoを使用するようになったのが分かる。
- 17) 2003年8月10日のフィールドノートより。
- 18) このバフジャン・サマージ(Bahujan Samaj)がどのカーストを含むかという問題は明らかではない。この言葉はゴア最初の首相ダーヤンド・バンドドカール(Dayand Bhandodkar)の任期中(1963-1973)に使用されるようになった(Fernandes 1997)。バンドドカール自体はデウリ(Devli)である。デウリは寺院で働く人々であり、低カーストとして認知されているが、指定カーストではない。デウリに加え、カラヴァント(Kalavant)、バヴィン(Bhavin)、クランビニ(Kulambini)とあわせてデウダーシー(Devdasis)とも呼ばれる。最近ではこれらの総称としてゴマンタック・マラータ・サマージ(Gomantak Maratha Samaj)の呼び名が用いられているという(Shirodakar and Mandal 1993)。これらのカース

- トに加え、椰子の樹液取りであるバンダーリー (Bhandari)、牛飼いのダンガール (Dhangar) もバフジャン・サマージに含まれると考えられる。
- 19) 1980年代半ばとなると、これまでのブラーマン中心の伝統的知識人とは異なる知識人がコーンクニー文学サークルに入ってきた。彼らはバフジャン・サマージのカーストであり、マラーティ語教育の恩恵を受けた人々であった。教育を受けるにしたいが、マラーティ語ではなく母語で書く必要を感じ、コーンクニー文学に目を向けるようになる。その中の一人がバンダーリーク・ナイクであった。
 - 20) コーンクニー語派とマラーティ語派のアジテーションの進行過程については、鈴木 (2001) を参照のこと。
 - 21) 当時学生としてコーンクニー語運動に関わったベルナデッテ・ゴメッシュ博士の話より。
 - 22) 例えば、筆者の調査期間中の2001年にはヒンディー語文学との交流ワークショップが開かれた。
 - 23) 2001年9月3日、ウデイ・ベンブレ氏とのインタビューによる。
 - 24) TSKKのホームページを参照した (<http://www.goajesuits.org/tskk.htm>)。
 - 25) アルメイダ神父はワシントンDCのジョージタウン大学にて言語学の博士号を取得した。一方、ナイク神父はプネー大学の博士号を持っている。
 - 26) 初級はTSKKで2001年4月17日～5月15日の期間、中級はパナジ市ミラマール地区のロヨラ・ホールにて2001年4月24日～5月15日の間に行われた。
 - 27) これらの情報は、アルメイダ神父より頂いた“TSKK Annual Report 2001”から得た。
 - 28) コーンクニー言語協会、ゴア・コーンクニー・アカデミともにローマ字で書く作家の本の出版をほとんど行っていない。ローマ字で書かれているのはゴアの大衆演劇ティアトル *tiatr* の台本集のみである。この辺りにもキリスト教徒のコーンクニー語軽視の傾向が見てとれる。それに対してTSKKは、イエズス会士M神父の手によるローマ字のゴアの教会紹介本を発行している。
 - 29) これは、一つはキリスト教徒の話すコーンクニー語がポルトガル語の影響を多く受けていることに関係している。また、コーンクニー作家の一人K氏は、ローマ字で書くキリスト教徒の作家たちの作品に触れ、「彼らの作品の質は同じままで、発展の余地がない。我々 (デーヴァナーガリー文字で書くヒンドゥー教徒の作家) には勝てない」と述べた。
 - 30) ゴア・コーンクニー・アカデミ所長 (2001年当時) のベンブレ氏はこれを裏付ける発言をしている。「我々はコーンクニー言語協会と協力して正書法の確立を目指しているが、TSKKとの協力関係はあまりない。彼らはマンガロール出身者だしね」(2001年9月3日のインタビューによる)
 - 31) ラボソ (2004) によれば、2004年になってようやくゴア・コーンクニー・アカデミがローマ字筆記のコーンクニー語による文学活動を財政的に支援する態度を打ち出した。
 - 32) 2005年に入り、ダルガード研究所はダルガード・コーンクニー・アカデミとして動きを活発化させている。それとともにゴア教会の姿勢も明確になり始めた。アカデミのメンバーにはゴア教会の神父が名を連ね、ゴア教会の機関紙である *Renovacao* の2005年8月16-31日号には、ゴア政府に対してアカデミが出した要求のリストが報告されている。それには、「公用語令を修正し、デーヴァナーガリー文字に加えてローマ字をコーンクニー語筆記の文字として認定すること」、「文学賞授与対象にローマ字の作品も含めること」、「コーンクニー語で教育を行う際にローマ字をデーヴァナーガリー文字に加えて別の選択肢として認めること」などが含まれている。

文 献

- Cohn, Bernard S.
1996 *Colonialism and Its Forms of Knowledge*. Princeton: Princeton University Press.
- Costa, Cosme Jose
1997 *Missiological Conflict between Padroado and Propaganda in the East*. Pilar: Pilar Publications.
- D'Costa, Adelyne
1977 Caste stratification among the Roman Catholics of Goa, *Man in India*. 57 (4): 283-292.
- De Bragança, Pereira
1991 (1923) *Etnografia da India Portuguesa as Civilizações da India vol.2*. Delhi: Asian Educational Services.
- Estevõ Tomas
1945 (1622) *Doutrina Cristã em Língua Concani* (introduction, notes and glossaries by Agencia Geral das Colonias in Portuguese). Lisboa: Divisao de Publicacoes e Biblioteca.
- Fernandes, Aureliano
1997 *Cabinet Government in Goa 1961-1993: A Chronicled Analysis of 30 years of Government and Politics in Goa*. Panaji: Maureen & Camvet.
- Göichî Sevadhormik Somiti
1974 *Povitr Pustok: Novo Korar*. Adlem Goem: Göichî Sevadhormik Somiti.
- Goychi Sevadhormik Somiti
1995 *Loka Sangatim Misachi Manddavoll ani Gaionancho Jhelo*. Adlem Goem: Goychi Sevadhormik Somiti.
- Gomes, Olivinho J. F.
1999 *Old Konkani Language and Literature: The Portuguese Role*. Chandor: Konkani Sorospot Prakashan.
- Macedo, Leo (ed.)
1997 *Goa University Hand-Book 1997-98*. Taleigao Plateau: Goa University.
- Maruyama, Toru
1997 A Note on the Nature of अ (a) in Konkani. *Akademia Bungaku-Gogaku hen* 62: 311-315.
- Matsukawa, Kyoko
2000 European Images of India before the Rise of Orientalism in the Late Eighteenth Century. A thesis submitted for the degree of M.Phil. to the London School of Economics and Political Science, University of London.
- Pereira, A.
1982 *The Makers of Konkani Literature*. self published.
- Pereira, Rui Gomes
1978 *Goa vol.1: Hindu Temples and Deities* (translated from the original in Portuguese by Antonio Victor Conto). Panaji: Author.

- Priolkar, Anant Kakba
1991 (1961) *The Goa Inquisition. Voice of India.*
- Rafael, Vicente L.
1993 *Contracting Colonialism: Translation and Christian Conversion in Tagalog Society Under Early Spanish Rule.* Durhan; London: Duke University Press.
- Raposo, Peter
2004 Church Leaders Welcome Goa Govt's Decision To Aid Konkani In Roman Script (http://www.goacom.com/ipfs/lusofonia/2004/oct/doc_28.html).
- Sardessai, Manoharraaj
2000 *A History of Konkani Literature (From 1500-1992).* New Delhi: Sahitya Akademi.
- Shirodkar, P. P. and Mandal, H. K. (eds.)
1993 *People of India: Goa.* Bombay: Popular Prakashan.
- Visvanathan, Susan
1993 *The Christians of Kerala: History, Belief and Ritual among the Yokoba.* Delhi: Oxford University Press.
- Varde, P. S.
1977 *History of Education in Goa from 1510 to Present Day.* Panaji: Goa Vidya Pratishthan.
- オング, ウォルター J.
1991 『声の文化と文字の文化』 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳, 藤原書店。
- 梶玉 望
2003 「コンカニ語—言語か方言か」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 vol. 2。
- 齋藤 晃
2002 「福音の言語—新大陸におけるイエズス会の言語政策」杉本良男編『福音と文明化の人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告 31) pp.13-53, 国立民族学博物館。
- 杉本良男
2002 「帝国の夢, 国家の軌—福音と文明化のパラドックス」杉本良男編『福音と文明化の人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告31) pp.99-134, 国立民族学博物館。
2003 「南インドのドラヴィダ・ナショナリズム」小谷汪之編『現代南アジア 5 社会・文化・ジェンダー』 pp. 99-116, 東京大学出版局。
- 鈴木義里
2001 「ゴアの言語紛争 (1985-87) —言語, 宗教, 政治」『アジア・アフリカ言語文化研究』 61: 52-274。
- 高瀬弘一郎
1993 『キリシタンの世紀—ザビエル渡日から「鎖国」まで』岩波書店。
- 浜岡 究
2003 「布教保護権と国家意識」『武蔵大学人文学会雑誌』 34 (3): 116-124。
- 丸山 徹
2001 「『17世紀書写コンカニ語・ポルトガル語辞書』タイプ版覚書」『アカデミア 文学・語学編』 70: 219-227。